(2019.4改正)

＜別紙１＞

第三者評価結果報告書

①第三者評価機関名

株式会社R-CORPORATION

②施設・事業所情報

名称：くるみ学園児童		種別：福祉型障害児入所施設
代表者氏名：坂本　耕一		定員（利用人数）：20名
所在地：〒241-0812 横浜市旭区金が谷550番地		
TEL：045－951-1711		ホームページ：https://le-pli.jp/
【施設・事業所の概要】		
開設年月日：1967年04月01日		
経営法人・設置主体（法人名等）：社会福祉法人ル・プリ		
職員数	常勤職員：20名	非常勤職員：2名
専門職員	（専門職の名称）：　名	児童指導員：8名
	保育士：4名	管理栄養士：1名
	社会福祉士：4名	看護師：1名
	医師（嘱託）：1名	
施設・設備の概要	（居室数）	（設備等）
	一人部屋20室	食堂4室
		療育室
		相談室
		浴室4室
		医務室
		静養室2室

③理念・基本方針

＜理　念＞

１．くるみ会に集うすべての人のウェルビーイングを目指します。

２．利用者に対し、その人格の尊厳を尊重し、その人ごとの様々なヒューマンニーズを充足させる支援を行います。

３．人々がそれぞれに持つ脆弱性（ヴァルネラビリティ）を包み込める共生社会の実現に、社会福祉の実践者として参画します。

＜基本方針＞

１．運営の透明性を担保し、コンプライアンス意識を高め、さらにそれを上回る高い倫理をもって、常に自ら学び続けられる組織を目指します。

２．社会福祉における、地域福祉への流れに貢献するとともに、利用者の皆さん個々それぞれの願いに応えていきていきます。同時に、その先でくるみ会につながるたくさんの人たちとわれわれを結びつけるはるかな願いにも応えられるようにすることを忘れません。

④施設・事業所の特徴的な取組

＜くるみ学園の特徴的な取り組み＞
１．法人として、年齢に応じた支援の提供～過齢児を出さない取り組み～
２．施設独自の活動の提供（グループ活動、フロア・ユニット活動、全体活動、など）～障碍特性に応じた枠組みのある生活の提供～

⑤第三者評価の受審状況

評価実施期間	2021年11月04日（契約日）　～ 2022年03月29日（評価結果確定日）
受審回数（前回の受審時期）	2回（2018年度）

⑥総評

＜概　要＞
社会福祉法人ル・プリは、平成29年4月1日に「杜の会」、「くるみ会」、「試行会」の3つの法人が合併して誕生しました。4年余りが経過し、当初、焦らず進めた体制から現在、社会福祉法人ル・プリとしてのスケールメリットを発揮すべきとの機運がひしひしと感じられます。例えば、人材採用コストでは、これまでは事業本部単位での採用であったため、採用費用は各事業部1/3となり、コストパフォーマンスが低かったのですが、３事業本部で採用を一本化し、3倍の費用を一括して使用できる等、効率化が図られています。社会福祉法人ル・プリでは、活性化も含めた推進機構を設定して3法人合併の促進力を図り、益々躍進し、社会に貢献しています。

◇特に評価の高い点
１．「完全な小舎制に基づく一人ひとりに目の行き届いた支援」
●くるみ学園児童では、完全な小舎制が取られています。職員は各ユニットに1名が勤務し、夜勤は各フロアに1名の体制にてユニットごとに連絡を密にしながら子どもの支援にあたっています。子どもの平均年齢は男子14.2歳、女子15.8歳であり、高齢児化及び家庭復帰の困難性が課題ですが、実態を認識し、施設では「過齢児（18歳以上）を施設に残さない」ことをビジョンとし、特別支援学校の就労活動の支援及び入所児の卒園後の適切な生活の場（男性は施設入所支援の「ホルツハウゼ」、女性は「くるみ学園成人」、知的障碍が軽度の子どもの退園後は「グループホーム」）への移行を検討し、一人ひとりに目の行き届いた支援を進めています。

2．「障碍児概念の変化とその対応」
福祉型児障害入所施設は従来、強度行動障碍等障碍ゆえに在宅生活・在宅養育が困難となった障碍児の入所施設ですが、国レベルでも現在は、障碍のある社会的養護の児童／障碍のある被虐待児という認識となっており、入所児童の内訳はほとんどが軽度児で、児童養護施設や児童自立支援施設からの措置変更による入所の増加という現状があり、児童養護施設や児童自立支援施設と同様に社会的養護児を受け入れています。従来の強度行動障碍への対応や、重度児へのADL獲得支援と合わせて、ASDをはじめとする発達障碍児への支援、トラウマケア等、職員に求められる支援力は多岐に亘っています。また、施設では家庭に戻れない子どもたちが大半を占めているため、施設が「家庭」となって安全で安心できる養育環境・生活環境が求められています。過齢児対策を含め、職員の対応は幅広く、入所児の障碍特性に応じた専門的な支援・指導の提供ができるプロフェッショナルな職員集団の育成（福祉専門職）に力を入れ、実践に取り組んでいます。

◇改善を求められる点
１．「3組織が合併したスケールメリットを生かすための内部体制の構築について」
社会福祉法人ル・プリでは、スケールメリットを生かす具体策、同系統施設の横組織の

構築等への動きが開始されましたが、法人の合併は異業種の合併と異なり、その事業・業務内容が同じだけに内容が分かり、これまで独自に事業展開してきた所以において引かれるラインも存在しますが、3事業本部の存在を１つにすべく、内部体制の強化により、それに沿い、全体のラインの統一からくるみ学園児童の在り方、方向性の確立が期待されます。職員一人ひとりが最大公約数の確立のみを目指し、さらにスピーディーに、法人一体化の達成に向けて取り組んで行かれることが望まれます。

２．「卒園、退園後のフォロー体制について」
福祉型障害児入所施設の最大の問題点は、18歳で生活の場が確保できないが故に子どもが施設に残らなければならないという問題です。選挙権に合わせて18歳成人となった今、国、地方自治体がこの子どもたちをどう救ってくれるのか鑑みられるところですが、くるみ学園児童では、障碍児入所施設における養育支援の考え方をより広く且つ、より深く発展させようと努力し、子ども一人ひとりのことを考え、職員の努力により卒園・退園後の生活の安定等に尽力しています。子どもの将来を考え、福祉を担う大きな勢力をもった社会福祉法人ル・プリとくるみ学園児童の取り組みが、今後、制度、政策への関与の期待と、布石を打つ手立てへと期待いたしております。

⑦第三者評価結果に対する施設・事業所のコメント

施設名：　くるみ学園児童

＜評価（自己評価等）に取り組んだ感想＞

大きなトラブルも発生しない中では、日々の支援だけに埋没されがちですが、今回の第三者評価を通して、客観的に日々の支援や施設運営を振り返る良い機会となりました。例えば、様々な掲示物の更新をしていなかったり、投書箱も投書し易いとは言えないような場所に設置されていたりと、当たり前のことが出来ていない、根本的に子どもたちへの日々の支援の前提条件が結果としておろそかにしてしまっていたことを気づくことが出来たと思っています。何も起こっていないのだから大丈夫だろうという現状認識の甘さや正常化バイアスが無意識のうちに私たち支援する側の感覚を麻痺させていることに気づかされました。
調査項目そのものが、施設運営や経営、日々の支援における大事なポイントとなっており、不十分なところは、改善していきたいと思っています。

＜評価後取り組んだ事として＞

１．自己評価結果について、職員会議を活用して職員と共有するとともに、取り組むべき課題認識についての共有化を図りました。

２．まず簡単に取り組むことが出来ること、掲示物のチェックを行い、更新を図っています。

３．投書箱を、子どもたちだけではなく、実習生や見学者、業者等であっても不自然ではない場所に設置しました。今後、増やしていく予定です。

⑧第三者評価結果

別紙２のとおり